

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

戯曲

「恋する各駅停車」

作 ササキタツオ

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

《登場人物》

遠山花音（16） 高校1年生。

田端俊太（16） 高校1年生。

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

《本編》

■第一場…通学電車

駅のホーム。

花音が文庫本を片手に立っている。

花音「朝早く駅に着いて、そこで大体30分
くらい本を読んで過ごす。それが私の日課
です。急行・各駅・準急・特急・各駅・急
行……。何本も、何本も電車をやり過ぎし
ます。そうやっているうちに《彼》がやっ
てくるんです。彼とは、中学の時の同級生、
田端君です……。私、彼の事が気になってい
るんです……。」

やってくる俊太。

本を片手に花音から少し離れたとこ
ろで電車を待つ。

花音が俊太を気にしながら、語りを持
ける。

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

花音「私と田端君は、同級生だったという関係で。中学時代は一言も話したことがありません。ですが、高校生になってから、駅で顔を合わせたのがきっかけで。なんとなく私が一方的に田端君を待って、一緒に電車、各駅停車に乗って、通学する、というのが日課になりつつありました」

花音、身だしなみを整えて。

花音「田端君！ おはよ！」

俊太、花音に気づき、会釈する。

俊太「遠山さん。おはよう」

花音も会釈する。

だが、二人の会話はそれで終わる。

花音と俊太、それぞれ本を読んでいる。

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

電車がやってくる。
電車に乗る花音と俊太。

花音「私と田端君の日常は、お互いになんとなく、本を読んで、一緒に通学する……今日もそんな感じ」

花音「別の高校に通う田端君は途中下車してしまうんですけど。でも、一緒に並んで本を読む時間が何より嬉しいんです」

俊太、下車する。

俊太「遠山さん。それじゃ」

花音「そ、それじゃ！ またね！」

俊太、去る。

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

花音も電車を降りる。

歩き回りながら。

花音「毎朝、どうしようもなくこんな感じで、学校に着くころにはもうクタクタでして。授業はぼんやり、グダグダ過ごしてみたいになってて。あ、そもそも、田端君は、私なんかよりずーっと頭のいいところに通っているの、私なんか到底釣り合わないだろうなーって思ったりするのも日常茶飯事ですて……。ああ、今日もうまく話せなかったし……。大事なところで噛んじやうし。明日、どんな顔して会えばいいんだろう!? それが本当にわからないんです」

花音、頭を抱える。

■ 第二場…接近

花音が本を読んでいる。

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

花音 「急行・各駅・準急・特急・各駅・急行
……今日も駅で田端君を待ちます。電車が
通過していく。ガタンゴトン。こんな毎日
を私は一体いつまで繰り返すのだろうか……
。ガタンゴトン。そんなことを思ってい
たら、田端君はいつもより、30分も遅れ
てやってきました。私、遅刻確定だ」

やってくる俊太。

俊太 「遠山さん!？」

花音 「え。あー。うん。おはよ」

俊太 「おはよ」

花音 「私もギリギリになっちゃって……」

俊太 「寝坊、ですか？」

花音 「うん。まあ……寝坊です」

俊太 「そうなんですネ……僕も、そうです。

お互い大変でしたね」

花音 「田端君も？」

俊太 「はい。……寝坊っていうか、目覚まし

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

かけ忘れたのが失敗のもとっていうか」

花音「遅れるの、珍しいですよね」

俊太「そうですね。だから焦ったといえますか。でも、もう、一限間に合わなさそうなんです……ダメですね」

花音「私もダメそうです」

俊太「そうなんですか？　うちの高校、意外と駅から結構あるんです。遠山さんの高校は？」

花音「私のところも、駅から離れているので」

俊太「じゃあ、お互い、遅刻は免れられない感じですかね……」

花音「ですね……！」

俊太「なんか、どうせ遅れるなら、いっそサボって終点まで行くとかやってみてもいいかもしれませんね」

花音「え？」

俊太「いや、よく小説とかでないですか？　終

着駅まで行く、みたいな物語」

花音「ありますかね？」

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

俊太「ありますよ。あー。サボりたい」

花音「なんか田端君らしくない、感じです」

俊太「そうですか？ 僕ってどういうイメー

ジなんですか？」

花音「え……？」

俊太「遠山さんから見ても、でいいので」

花音「えーと……。それは、真面目っていう

か、実直っていうか……。なんといいですか

……。夏休みの宿題はきちんと毎日こなす

タイプみたいな」

俊太「なるほど。そんなイメージなんですネ。

本読んでるから、ですかね？」

花音「あー。そうかもしれません」

俊太「んー。僕は、そんな真面目じゃないで

すよ？」

花音「そ、そうなんですか？」

俊太「じゃあ、あれですね。今日は、学校1

限サボって終着駅まで行ってみることに

します。不真面目になります」

花音「え」

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

俊太 「真面目キャラ、払拭したいので」

花音 「でも。それ、1限だけってところがまだ

真面目ですよ」

俊太 「あー。そうか……」

花音 「はい」

俊太 「うーん」

花音 「じゃあ、私も」

俊太 「え？」

花音 「私も一緒に、行こうかな。終着駅」

俊太 「でも、授業は？」

花音 「私も真面目キャラじゃないので」

俊太 「いや、遠山さんこそ真面目ですよ」

花音 「本読んでいるからですか？」

俊太 「そう、かも」

花音 「じゃあ、私も真面目キャラ払拭したい

ので、付き合います」

俊太 「わかりました。では、行ってみましょ

うか」

花音 「行きましょ！」

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

やってきた電車に乗る花音と俊太。
本を読む花音。
本を読む俊太。

花音「こうして、私たちは、終着駅を目指して電車に乗りました。終着駅までは、約1時間。ただひたすらにお互い本を読みました。ガタンゴトン。ガタンゴトン……」

電車、到着する。

花音と俊太、電車を降りる。

花音「つきましたね」

俊太「ですね。これは想像してなかった景色です。緑が眩しい」

花音「意外と、田舎ですね」

俊太「田舎っていうか山ですね」

花音「確かに、そうですね」

俊太「歩いてみますか？」

花音「え……？」

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

俊太「せっかく来たので。記念に」

花音「いいですね」

俊太と花音歩き回る。

花音「そうして、私たちは、山登りをしました。緑が気持ちよくて。風が通り抜けて。私は田端君を見て。田端君が私を見て。笑って。そうして、また歩いて。歩いて。歩いて……ひたすら歩いて。夕暮れになりました……」

俊太「夕焼けって不思議です」

花音「どうして、ですか？」

俊太「だって、虹色になるじゃないですか。」

世界の境界が曖昧になるみたいなの、感じ」

花音「ああ。わかる気がします」

俊太「だから、なんかこの一瞬を大事にしな

いとイケないなって思うんです」

花音「私も、そう思います」

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

花音「そして、私たちは一緒に夕焼けを眺めたのでした」

鮮やかな夕日が二人を包みながら……。

■第三場…距離

駅。ホーム。花音、一人。

花音「それから。私たちは今まで以上に距離が近くなった感じがして。二人で早めに駅で落ち合うようになりました」

俊太、やってくる。

花音と俊太。

花音「田端君！」

俊太「あ。遠山さん。おはよ！」

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

花音「おはよー」

俊太「本？ 何読んでるの？」

花音「いまは、太宰治です」

俊太「面白いですか？」

花音「なんか軽いです」

俊太「そうなんですか？」

花音「そうです。軽い男の人が出てきます」

俊太「そうなんですね……なるほど」

花音「軽い男の人って、私、ダメかもしれない
せん。どうも読み進めるのが大変です」

俊太「太宰ってそんな感じなのですか？」

花音「軽いんです。私、苦手かもしれない。

きつと作者も軽い人だろうな、って思うんです。人間性が出てるのかもしれないって」

俊太「確かに、現実に行ったらキツイかも、です
すね。あ、文豪だから現実にいたのか」

花音「確かに……。田端君は？ 何を読んで
いるのですか？」

俊太「え。ああ……。実は、僕も太宰、読んで
るんです」

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

花音「え……」

俊太「言われてみれば、確かに、軽い男って
いう感じかもしれませぬ……」

花音「(慌てて取り繕う)そ、そうですよね！？
田端君もそう思いますよね！」

花音「ああ。私の頭は大パニックだ。これで
は、田端君に「あなたは軽い男ですね！」
と言ってしまったようなものだ。どうにか
とりつくるわねば！ どうかにかー！」

花音「……」

俊太「でも、太宰って女性目線でも書ける人
でもあるんです」

花音「え……？」

俊太「【女生徒】って作品読んでるんですけど。
女性目線で書かれていて、面白いというか、
興味深いです」

花音「そ、そうなんですわね……！」

俊太「比べてみると面白いかもしれませぬ」

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

花音「ですね！ 今度読んでみます！」

花音「助かった。ピンチを脱した……！」

本を読んでいる、俊太。

本を読んでいるが、俊太を気にして落ち着きがない花音。

花音「ああ。でも。でもでもでも。やっぱり気になる。気になって仕方がない。さっきの会話。きっと私のこと嫌な女子だと思っただろうな。思われただろうな。どうだろう？ あれ？ もしかして、そんなことを考えている私って本当に嫌な女子なのだろうか？ 私って……私って……どうなんだろう！？ もうわけわかんない！」

本を読む花音。

花音「ああ。わかんないよー」

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

花音と俊太、視線が合う。
会釈する二人。

■ 第四場 .. 時間

駅。ホーム。

花音が本を片手に立っている。

やってくる俊太。

お互いに会釈しあって本を読み始める。

花音「そんな朝の時間が毎日続いていって、
学校が始まるギリギリの時間まで話すよ
うになって、色々な話をして。何本も何本
も電車をやり過ぎす本数が日に日に増え
て行って……。乗る電車も各駅停車にして、
そんな二人だけの時間を過ごして」

俊太「遠山さん、好きな作家さんいますか？」

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

花音 「私は、辻村深月さんとか、ですかね」

俊太 「僕は、東野圭吾さんとか」

花音 「いいですね」

俊太 「今度、本の交換しませんか？」

花音 「え？」

俊太 「お互いのおすすすめを」

花音 「はい」

俊太 「音楽は何を聴いたりしますか？」

花音 「私は、あいみよん、とか、ヒゲダンと

か、ハヤリの曲が多いです」

俊太 「ハヤリの曲、でも、いいですよね」

花音 「はい」

俊太 「あの……遠山さんって数学得意です

か？ 実は、僕、理系科目苦手で……」

花音 「私、と、得意です……！」

俊太 「え。じゃあ、今度教えてくれませんか？」

花音 「え。あ。はい。もちろんです！」

俊太、去る。

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

花音、一人。

花音「なんだろう。距離が近くなっていく。嬉しくて。心が騒がしくて。落ち着かなくて。夜寝不足になって。でも早起きして……。田端君も私と同じ気持ちなのかなって思っ。そう思ったら、なんか緊張してきて、でも顔を合わせたら絶対にそんなそぶりは見せないようにして。友達。これはいお友達なんだ！ って言い聞かせて、平静を保っていた。そんな関係がしばらく続いた、ある日のことだった。田端君から、【これからはちよつと早く学校に行くから、会えなくなります】ってラインをもらって。私は動揺した……。【どうしてですか？】って聞いたたら、返事が返ってこなくて……。嫌な予感がして……」

やってくる俊太。

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

花音 「田端君！」

俊太 「遠山さん……はいですね……」

花音 「だって。あんなラインだけじゃ、それに返事も……くれないので……」

俊太 「ごめん……」

花音 「何かあったんですか？」

俊太 「ん……」

花音 「どうしたんですか？」

俊太 「遠山さんは、僕の友達ですよね？」

花音 「はい。もちろんです」

俊太 「でも、女子、ですよね？」

花音 「そうです、けど……」

俊太 「だから、ごめんなさい」

花音 「え。どういうことですか？」

俊太 「実は、同じ高校の同級生の女の子から

告白されて……付き合うことにしたんです」

花音 「そ、そうなんです……」

俊太 「はい」

花音 「なるほど、です……。私、なんか変な

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

ことしたのかと思ってしまいました」

俊太「いや、でも……遠山さん……。だから、
もう一緒には通学できないっていうか……
……」

花音「え。あ。そういうこと、なんですね」

俊太「はい」

花音「そうなんですね……」

俊太「ごめんなさい……」

花音「いえ。そんな、気をつかいすぎですよ。
私に悪いなんて全然ないと思いますし。友
達、ですから……」

俊太「これからは、その、彼女と一緒に行く
ことになって。彼女に、遠山さんみたいな
女友達がいるって話したら、もう会わない
ほしいでって言われたんです……」

花音「それは……でも、彼女さんの気持ち、
わかりますよ」

俊太「そう、ですか？」

花音「はい」

俊太「そうですよね……」

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

花音 「はい……」

俊太「とにかく、そういうことになりました」

花音 「……わかりました」

二人の間に長い沈黙。

■第五場…その後

駅。ホーム。

花音が一人。

花音 「私は田端君との交信を絶った。これまでに積み重ねてきたものは一体何だったんだろう。学校にもわざと早く行くようにしました。偶然、田端君に会ってしまったら、どんな顔をしたらいいかわからないから。そして、実は苦手だった数学の勉強をやめて。太宰治の本も古本屋に売って。好きでもないハヤリの音楽をチェックするのも

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

やめて……。ああ、私の恋は初めから叶う
ものではなかったのだ。悔しい。気持ちは
押し殺せても、涙があふれて。こうなるな
ら、早く告白すればよかった。彼が隣にい
るのが当たり前のように思ってしまった
いた。それが間違っていた。あの日、なん
で一緒の電車に乗って、執着駅まで行っ
たのか。思い出される気持ちは、否定したい
想いとは裏腹に、輝いて感じられました」

花音「女友達は言いました。【その男子最低だ
ね。最悪だね】と。でも、私はそれでも田
端君を嫌いになれませんでした。彼は私の
中では、やっぱり一番だから。見つめ合う
と素直に話せなくて、心が締め付けられて、
うまく返事できないと彼がはにかんで、そ
れがなんだか嬉しくて。そんな気持ちにな
れる相手、もう二度と現れない。私は覚悟
を決めました」

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

花音「急行・各駅・準急・特急・各駅・急行
……。彼が来るまで。何本も、何本も、電
車が通り過ぎていく。私は待った。待ち続
けた。日が暮れていって。夕焼けが終わり
そうになって。いつか、田端君と一緒に山
に登った日のことを思い出しながら……
眩しい緑を思い出しながら。まぶしい彼の
姿を思い出しながら」

やってくる俊太。

俊太「と、遠山さん……？」

花音「田端君！」

俊太「いま帰りですか？」

花音「はい。でも、違います」

俊太「違う、って？」

花音「あのね。田端君に聞いてほしいことが
あつて」

俊太「……」

花音「……私、田端君が好きでした！」

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

俊太 「遠山さん……」

花音 「ああっ！ やつと言えた！」

俊太 「でも……僕は……」

花音 「よく聞いてましたか？ 好きでした！
なのです。過去形です」

俊太 「え……？ 過去形？」

花音 「私、もつといい人、探します。太宰み
たいな軽い男も、太宰好きっていう軽そ
うな人も無理なので。だから、私、田端君と
ちやんとお別れしに来たんです。」

俊太 「お別れ……」

花音 「はい。だから、田端君、バイバイ！」

俊太 「……」

花音 「バイバイ！」

俊太 「……それじゃ」

俊太、去る。

花音、一人、残る……。

戯曲「恋する各駅停車」
作 ササキタツオ

花音 「さよなら……田端君」

恋が、春の終わりの光に溶けるように
して……。

(終)